
願いを叶える虹色の石

早瀬恭一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いを叶える虹色の石

【Nコード】

N7407L

【作者名】

早瀬恭一

【あらすじ】

12才の好奇心旺盛な啓太が、ある日山で見つけた虹色の石。啓太が何かを願うたびに、石は輝きを放つ。そして石は、願いを叶えると共に一つずつ色を失っていく。

啓太が最後に願うものは……。

前編、後編の二部構成。無垢な少年の、現代ファンタジー。

前編

緑茂る山に囲まれ、都会まで車で一時間かかる田舎の町。この町で啓太は生まれ育った。好奇心旺盛な啓太は、今年で12歳になる。学校が終わるとすぐに、裏山に遊びに出かけるのが啓太の日課だ。今日も、真夏の太陽の下、慣れ親しんだ山の中を新たな発見を求めて歩き回っていた。

二時間ほど遊んだあとで、啓太は母からお使いを頼まれていたことを思い出した。少し風邪気味の妹のために、薬局で薬を買って帰るよう言われていたのだった。

急いで、尾根に沿って山を駆け下りる。夕飯までにはおつかいを終えて家に帰れるだろうと啓太は考えていた。するとその途中、道端に見たこともない花が咲いていることに気がついた。

七色に輝く花びらに、啓太は心を奪われた。

その七色の花は、谷へと続く急な斜面に咲いていた。

もつと間近で見たいと思った啓太は、谷に落ちないよう慎重に花へと手を伸ばした。しかし、花に手が届く寸前、足元が崩れ、啓太は谷へと滑り落ちてしまった。

「いったー。おれとしたことが……」

啓太はずきずきと痛むお尻に手を当てながら辺りを見渡した。

（このまま川に沿って降りれば家に帰れるかなあ）

そう思っ、再び山を降り始めたとき、啓太は右手の斜面に小さな洞穴があることに気がついた。

「こんなとこに洞穴？ 動物でも住んでるんか？」

お尻の痛みなどすっかり忘れて、啓太は洞穴の方へ向かった。

近くによって見てみると、その穴は直径50cm程度の入り口で、奥の方には何かキラキラしたものが置いてあった。

誰かが隠した宝物かもしれない。

そう胸を躍らせて中のものを取り出すと、出てきたのはレモン程度の大きさの、虹色の輝きを放つ石だった。

今まで一番の大発見に、啓太は興奮を抑えられなかった。家族に自慢してやろうと、啓太は全速力で家に向かって駆け出したのだった。

はあはあ、と息を切らせながら、玄関の扉を開けると、すぐに母が駆け寄ってきた。

「遅かったじゃない、啓太。それで、ちゃんと薬は買ってきたの？」
そこで啓太は、頼まれていたおつかいのことを思い出した。

「あ！ やっべー。忘れてた」

「何やってるの。……もういいわ。母さんが買ってくるから」

叱られた啓太は、しょんぼりしながら妹の部屋へと入った。畳と湿気の匂いの混じる部屋の中に、妹が寝込んでいた。

寝ている妹の顔は、今朝よりも熱っぽいように見えた。

その顔を見て、啓太の心に後悔の念が広がった。

もし山の中で遊ばなければ、もっと早く風邪薬を届けていれば良かったと。そして、妹の風邪が今すぐに治ればいいのにと、石を持った手をギュッと握り締めた。

すると突然、虹色の石が輝きだした。部屋中に青色の光が満ち、啓太は驚きのあまり尻餅をついて、石をその場に落としてしまった。

青色の光はすぐに収まった。

「おにいちゃん？」

物音で妹が目を覚ました。しかし啓太は、何が起きたのか理解できず、返事もできずにすっかり困惑していた。

そんな啓太とは裏腹に、妹はゆっくりと布団から起き上がると、すたすたと歩き出した。

「お、おい。寝てなきゃだめだろ」

「ん？　なんか風邪治ったみたい。ほら、大丈夫だよ」

妹はそう言くと、ぴよんぴよんと、その場で飛び跳ねてみせた。突然治った風邪には、程なくして帰ってきた母も驚いていた。妹はすっかり良くなったようで、夕飯ではいつも以上に食べていた。

夜になって、啓太は山で拾った虹色の石のことを思い出した。妹の騒動で、それまですっかり忘れていたのだった。

慌てて和室に向かうと、石は部屋の隅の方に転がっていた。手に取ってみると、虹色の石は昼とどこか変わっているように見えた。拾ったときほど綺麗ではない、そんな風だった。

それでも、キラキラ輝く石は綺麗で、さっそく台所で夕飯の片付けをしている母に見せに行った。

「かーちゃん、これ見てよ。今日山で拾ったんだけど、すごく綺麗なんだよ」

「それよりも啓太、あなた宿題は終わったの？　帰ってきてから一度も勉強してないじゃない」

「そんなことより、この石見てよ。すごく綺麗なんだよ」

「作文、明日までなんでしょ？　昨日も明日やるって言って、全然やってないじゃない」

そう言われ、またしょんぼりしながら、啓太は自分の部屋へ帰った。

「なんだよ、いつも宿題宿題って」

ふて腐れながら、机にうつ伏せになる。

「はあ、めんどくさい。明日学校なくなればいいのに」

すると、啓太の声に反応するように、虹色の石が再び輝き出した。今度は、部屋中が緑色の光で満たされた。

光はすぐに収まったが、すぐに「ずごくごく……」と地鳴りのような音が聞こえてきた。

「うわあ。な、なんだなんだ」

怖くなった啓太は、布団の中に潜り込んだ。地鳴りは、15秒程で鳴り止んだが、啓太にはそれ以上に感じられた。

全てが過ぎ去った後の部屋には、時計の音だけが響き渡っていた。それ以上の速さで脈打つ自分の鼓動を必死で抑えながら、啓太は、ただ時間が過ぎるのを待つしかなかった。

ふと、遠くで電話の鳴る音が聞こえ、誰かの足音がした。おそらく母が電話に出たのだろう。耳を澄ませていると、ドタドタという足音が近づいてきた。がらっ、と啓太の部屋のドアが開き、慌てた顔の母が入ってきた。

「大変よ！ 学校の裏山が崩れたんだって」

その後、地元の建設会社で働く父が帰ってきて、詳細を聞かされた。学校の裏山が突然崩れて、その土砂で学校の一部が潰れたらしい。

幸い怪我人はいなかったようだが、土砂を取り除くまでの間学校は休校するしかないとのことだった。

啓太は、石が、自分の願いを叶えていることを知った。啓太が願ったから、妹の風邪が治り、啓太が願ったから、明日学校が休みになった。

青と緑の光を放った石は、元の虹色の面影はなく、真っ赤な石となっていた。

理科の授業で習ったことがある。光の三原色は青、緑、そして赤だ。多分、あと一つだけ、なんでも自分の願いが叶ってしまう。

その日の夜、啓太は怖くて眠ることができなかった。

前編（後書き）

第三者の視点から物語を書こうと決め、書き始めたのがこの物語です。結構な時間をかけて書いたものの、改めて読んでみると大したポリウムではなく、一瞬で読み終わることにちょっと驚いています。近々後編をアップします。

後編（前書き）

何でも願いが叶う、虹色の石を拾った啓太。
石が叶えてくれる願いは残り一つ。

しかし、今までの願い事が、啓太の日常を少しずつ狂わせていた。

後編

次の日、目が覚めた啓太は真つ先に石を机の引き出しの奥に隠した。誰にも見つからないよう、出来る限りの工夫を凝らして石を隠した。

啓太は、石の持つ力が怖かったのだ。

しかし、日にちが経つにつれて、少しずつ石への恐怖が薄まると、啓太の中に別の感情が湧き上がってきた。

何でも願いが叶う石。

どんな事をお願いしようか。

学校で一番の人気者になりたい、頭が良くなりたい、大金持ちになりたい。

考えれば考えるほど、叶えたいことが次々と浮かんだ。

石のことを想う時間が増えていった。

学校が休みになってから3日後、ここ数日は、小雨が降り続いていた。

啓太は、ここ数日土砂に埋もれた学校の復旧のために、朝から晩まで働き続ける父のことを心配していた。一日でも早く、学校を元に戻そうと必死な父の姿に、啓太の心は痛んだ。

その夕方。

父を除く家族三人で夕飯を食べていると、家の電話が鳴り響いた。すぐさま母が電話に出た。いつも明るい母の声が、次第に沈んでいった。

「お父さんが、怪我をしたみたい」

学校の復旧現場で、事故があつたらしい。怪我の程度はわからず、すぐに母が病院へ向かった。

「僕のせいだ。僕が学校がなくなればいいなんて思ったから」

啓太は、急いで自分の部屋へ向かうと、机の中を引っくり返した。ハンカチをほどこいて、石を取り出し、啓太は目を疑った。

真っ赤だった石は、その色を失っていた。

「——な、なんでだよ。まだ願い事してないのに……」

啓太は石を持って、家を飛び出した。

石を拾った洞穴に、もしかしたら別の虹色の石があるんじゃないかと思つたからだ。

薄暗い山の中を、雨でぬかるむ坂を、何度も転びながらも駆け上がる。

額に浮かぶ水滴が、小雨なのか汗なのかわからないほど全力で走り続けた。

やがて、啓太は洞穴にたどり着いた。そして、素手で洞穴の中を

掘り返して、何度も別の石を探した。

でも、虹色の石はもう見つからなかった。

次に啓太は輝きを失った石を洞穴に戻した。しかし、何の反応もない。

「戻つてよ……。お願いだから、元に戻つてよ」

涙声で石に語りかけても、ただ時間だけが過ぎ去っていった。

その時、滲んだ啓太の視界の端に、きらりと光るものが映った。

慌てて振り向いた先、洞穴のある急な斜面の上のほうに、一輪の花を見つけた。

その花は、啓太が石を拾った日に見つけた、七色に輝く花だった。この前、自分が谷に落ちたせいか、それともその後の地滑りのせいか、花は根元を剥き出しにして土の上に横たわっていた。

四つん這いになって斜面を登る。手に取った花には、最初に見たときのような虹色の輝きは残っていなかった。

ただ、色を失ったその花びらの一つに、本当に僅かな赤みが残っていることに気がついた。

啓太は、ギョツと目を閉じて、花に願いを込めた。

心の中で、最後の願いを想った。

閉じたまぶたの向こうに、啓太は輝きを感じたが、そこで啓太の意識は途切れた。

……セミの鳴き声が聞こえる。

うるさいなあ、そう思いながら啓太は目を覚ました。辺りを見渡すと、いつも遊んでいる山の中であつた。

「あれ、なんでこんな所で寝てたんだ？」

そう思つて時計を見る。時刻は夕方になるところだつた。

「あ！ かーちゃんからおつかい頼まれてんだつた！」

少し風邪気味の妹のために、薬局で薬を買つて帰るよう言われていたのだつた。

急いで、尾根に沿つて山を駆け下りる。夕飯までにはおつかいを終えて家に帰れるだろうと啓太は考えた。

するとその途中、視界の端に何かキラキラ光るものを見つけた。

「ん？ なんだ？」

啓太は一瞬、立ち止まつて確かめようかと考えた。しかし、今日に限つては早く家に帰ろうという気になつた。

「……ま、いつか。早く風邪薬買つて帰んなきゃ」

今の出来事などすっかり忘れ、啓太は再び走り出した。

夏の温かな空気を感じながら、家路を急いだ。

後編（後書き）

12歳の少年を描くって難しいですね。

もっと子供っぽく書ければ良かったんですが、ちょっと大人びた子になってしまいました。

願いを叶える石をした少年は、どんなことを願うだろうか。
悩んだ末、このような物語が生まれました。

最後、ちょっと駆け足になってしまうのが僕の悪いところかもしれませんが、楽しんでもらえたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7407/>

願いを叶える虹色の石

2011年11月1日03時18分発行